

中国語翻訳・通訳ハンドブック

中国語 翻訳・通訳 ハンドブック

武吉次朗●著

41・599
513

東方書店

中国語翻訳・通訳ハンドブック

1984年4月15日 初版第1刷発行

著者●武吉次朗

発行者●安井正幸

発行所●株式会社東方書店

〒101 東京都千代田区神田神保町 1-3

電話 03 (294) 1001

出版部営業電話 03 (233) 1001

振替 東京 4-1001

組版+印刷+製本●図書印刷株式会社

定価●1200円

©1984 武吉次朗 Printed in Japan.

ISBN 4-497-84126-X C 2087

◎乱丁・落丁本はお取替えいたします。

恐れ入りますが小社出版部あてにご返送下さい。

目 次

PART I 【エッセイ】

- 1 中国語勉強のコツ——3
中国語はやさしい/3
中国語の難しさ/4
「案内」と「案外」——発音と四声/6
まぶたに浮かぶ——暗誦の効用/8
電話のすすめ——上達のメヤス/10
- 2 中国語のいいまわし——12
売買か買売か——名詞・〈中国の省・市のニックネーム〉/12
クスリを食べる——動詞/15
食べられない理由——形容詞・副詞/18
七人の孫——親族関係・〈親族関係図〉/20
死んだり生きたり——俗語/22
グー・チョキ・パー——あそびとスポーツ・〈スポーツ用語集〉/24
- 3 日本語のいいまわし——30
あゝ野麦峠——日本独特の表現・〈中国で上映された日本映画〉/30
ボロは着てても——俳句と格言・〈格言〉/33
ころころ、ごろごろ——擬音擬態語・〈擬音語〉/36
ウルトラC——時事用語・〈外交用語〉/38
いただきます——挨拶用語/41
立っている窓際族——経済用語/44
- 4 ヨコ文字とタテ文字——47
柔和七星——外来語・〈酒のリスト〉/47
和蘭と荷蘭——国名地名・〈国際機関名〉/50
ギョエテとゲーテ——人名・〈人名〉/53

西区故事・音楽之声——作品名*〈アカデミー作品賞映画〉/58	
航空と航天——兵器名*〈通信社・新聞雑誌, マスコミ用語〉/60	
手製の電話帳——技術用語/64	
5 習慣のちがいと言葉のちがい—————	67
質問は詰問——意味の良し悪し/67	
二倍は三倍——数詞と量詞*〈量詞〉/69	
親子はタブー——習慣の恐さ/72	
酒席代表——宴席マナーの違い*〈宴席席順図〉/74	
黄色は「悪い色」——色彩感覚*〈色彩語集〉/77	
油断一秒, 怪我一生——同字異義/80	
6 翻訳の心得とコツ—————	83
空気と理髪師——翻訳とは何か/83	
写真と TPO——翻訳の心がまえ(上)/85	
棋譜の再現——翻訳の心がまえ(下)/87	
ナニをナニして——翻訳の原則(上)/89	
メシが私を食べる——翻訳の原則(中)/91	
太平門と父子飯——翻訳の原則(下)/93	
錆びないねじ釘——むすび/95	

PART II 〔翻訳・通訳講座〕

インビテーション要請状—————	101
宴会での挨拶—————	105
共同新聞発表—————	110
日中貿易の解説記事—————	115
中文→日文→中文—————	120
発刊のことば—————	125
人民日報の記事から—————	130
簡明同義詞典—————	136
未完の対局—————	140

私の日文中訳	145
--------	-----

PART III 〔対談〕

日中「翻訳学」を語る◇中国大使館参事官王效賢女史＋武吉次朗	153
-------------------------------	-----

PART IV 〔データ・バンク〕

資料	165
----	-----

日中平和友好条約(日本文・中国文対照)/165

日中政府間の条約・協定・主な取り決め(日中対照)/168

単語集	170
-----	-----

世界の国・地域名/170

機械/177

電気・電子/181

化学/186

金属/189

化学元素対照表/191

附. 中国度量衡の名称および換算表/196

あとがき	199
------	-----

PART I

エッセイ

いまの職場(日本国際貿易促進協会)に勤めて21年、翻訳や通訳をやる機会が多く、その“役得”で、日中両国の政治家や経済界首脳の訾訾(けいがい)にも接してきた。だが訳のできればでは、顔から火が出る思いをしたり、いつまでも悔やまれることが多い。また、職場の同僚たちと翻訳勉強会を断続的にやっているが、その中からもヒントを得ることが少なくない。

そんな経験や感想を自分なりに整理してみたのが、この「パートⅠ」である。はじめは「翻訳・通訳のコツ」とでもいうものにまとめるつもりだったが、やっている内に、日本語と中国語の発想のちがいに立ち入らざるを得なくなり、さらには歴史や風土の相異にまでふれることになった。ことばとは、翻訳とは、本来そういうものなのだな、と改めて感じたしだいである。

なおこれは、日本国際貿易促進協会の週刊新聞「国際貿易」紙に、1982年3月から年末まで連載したもので、友人たちの助言をもとにかなり書き加えた。

1

中国語勉強のコツ

中国語はやさしい

「中国語の勉強は、トランプの“神経衰弱”みたいですね」
ある外交官の感想である。

その意味はこうだ。〈学校 xuéxiào〉の発音を覚えたあと、
人の名前に〈学〉が入っていたら、さて、どこで習ったかな、
そうだ、〈学校〉の〈学〉だ、と思い出せば、そしてそのとお
りの発音をすれば、まず間違いない。その思考過程が、ちょう
どトランプの“神経衰弱”のそれに似ている、というわけであ
る。

別の角度から見れば、われわれ日本人にとって、中国語を学
ぶことは易しい、ともいえる。

われわれは小学校一年生から漢字を習ってきた。常用漢字だ
けで1,945字。何だかだ合わせると2,500字ぐらいの漢字につ
いて、それぞれの音読みと訓読みとを知っているわけだ。中
には訓読みが何とおりもある字だってある。

それにもうひとつおり、「中国語読み」を加えればよいわけ
だ。幸い、「中国語読み」がふたとおり以上ある漢字は、かぞ
へるとしかない。

欧米人が漢字の書き方から中国語学習をはじめるのと比べるなら、ずっと易しいことになる。ちなみに、豆単に載っている大学受験に必須の英単語は6,000語強である。

中国語が日本語より易しい、という面もある。中国の日本語通訳、それもかなりのベテランに「日本語で難しいところは」とたずねると、必ずといってよいほどこんな返事がかえってくる。

——敬語と謙譲語の使い分け。頭が痛いですね。自信がないときは、むしろ使わないほうがよいと思いますが、それではブッキラボウに聞こえるし、時と場合によっては使う必要に迫られます。

——大人とこども、男と女の言葉づかいや単語がちがうのも、気にしだすとキリがありません。

これまた幸いなことに、中国語にはこうした区別がほとんどない。こうした区別の多少について、「中国は少なすぎ、日本は多すぎる」と評した人もいる。

中国語の難しさ

とはいえ、中国語に難しい面があるのも事実だ。

まず発音。母音も子音も、日本語よりはるかに複雑だ。有気音の練習で紙を吹いたり、ローソクを立てたりした経験をおもちの人も多い。私などOとEの口のひらき方をマスターしよう

と鏡に向かったのはよいが、おのが歯並びのあまりの悪さに呆れ、絶望しかけた。

それだけではない。日本で中国語を学び、はじめて訪中した人が一様におどろくのは、「中国人のナマリがひどくて聞きとれない」ことだ。日本で習ったようなキレイな標準語〈普通话 pǔtōnghuà〉で話してくれる人には、たまにしかお目にかからない。私は一度浙江省は寧波出身の幹部の通訳をしたが、ジッと口もとを見ていると辛うじて聞きとれるのに、メモをとろうと目線をおとしたとたん、まるでチンプンカンプンになって困った経験がある。

次に単語。同じ漢字を使うメリットは前に述べたが、半面、漢字を使うばかりに「同字異義」で迷わされることがある。ある人が訪中したさい、中国の通訳がホテルまで送ってくれ、別れぎわに「明日の朝、汽車でお迎えにあがります」といわれ仰天したのは、いまでも語り草になっている。

もう一つ。「松竹梅」といえば日本ではお目出度いことに使われるが、中国の〈松竹梅 sōngzhúméi〉は〈岁寒三友 suìhán-sānyǒu〉といって、いずれも寒さに強い植物であるところから、厳しい環境下で結束する真の友人を指す。

中国語の単語で、日本と大きく異なるのは、外来語がごく少ししかなく、ほとんどが中国語に訳されてしまうことだ。だから技術用語はいうに及ばず、生活用語にしても、昨今のようなご時勢になると新語が続々登場してくる。語学を志す者としては、名訳だと感心する以前に、日本の外来語と中国の新語をそ

ろえて、アタマの引出しに格納してゆかないといけない。

第三に文法。中国語に句読点はもちろんあるが、漢字ばかりズラリと並ぶと、切れ目が分りにくい。少々品が悪くて恐縮だが、これは中国で句読点を教えるとき引合いに出される笑い話

家の前に〈行人等不得在此小便 xíngrénděngbùdézàicǐxiǎobiàn〉と貼り紙をしたら、その前で立ちションをしているヤツがいる。「〈行人等，不得在此小便〉の字が目に入らないのか!」とどなったらその男、悠々と「ええ?〈行人，等不得(待ちきれない)在此小便〉ではなかったの?」——わが国の「カネオクレタノム」と同じようなものだ。

それはともかく、もっと本質的なことをいえば、何といっても風土、歴史といった根本のところ、日本との相異をつくづく感じる。ことばというのはコミュニケーションの道具にちがいないが、それぞれの民族の生成発展が背景になっているわけだから、そこまでふみこまないとマスターしたとはいえない。そして中華民族の奥行きは途方もなく深く、しばしばタメ息をつかせる。

中国語は、やはり難しい。

「案内」と「案内」——発音と四声

「中国語の発音でいちばんむずかしいのは?」とたずねられ

たら、かなり多くの人が「捲舌音だ」と答えるだろう。たしかに、Z と Zh, C と Ch, S と Sh の区別は、厄介だし、学生時代に苦勞した思い出をお持ちの方も少なくないだろう。

だが私には、n と ng の区別をつけることのほうがもっと難しく、しかもそのわりにはさほど注意されていないようにみえる。

日本語でも、「案内」と「案内」とでは「ん」の舌の位置がちがうのだが、字に書けばどちらも「ん」だから、n と ng とはちがうのだという概念が、なかなかもてない。ところが中国では、捲舌音は地方によってはそれほど厳密ではないが、n と ng を聞きわける耳は、どの地方の人でも鋭い。日立造船には因島工場と桜島工場があるが、中国の技術者を案内したとき、yīn-dào と yīngdào を「言いわけ」、聞きわけるのに苦勞したことがある。

「中国語の四声でいちばん難しいのは？」とたずねられたら、たいていの人が「三声だ」と答えるだろう。たしかに、\ノと一旦下がってまた上がる抑揚は厄介だし、これまた学生時代に苦勞した経験をおもちの方も多だろう。

だが私には、一声のほうがもっと難しく、しかもそのわりにはさほど注意されていないようにみえる。

中国のラジオやテレビで、アナウンサーが話すのを聞いていて感じるのは、ほかの発音に比べて一声がグンと高く発音されていることだ。一オクターブとはいかないまでも、二、三音階は確実に高い(と感じる)。中国語が音楽的だといわれる最大の

理由は、一声を思いきり高く、しかもどこまでもまっすぐに伸ばすところにあるのではないだろうか。

日本人は概してテレ屋だから、これがなかなかできないのだが、ひとつ思いきって試してみても如何。あなたの中国語にメリハリがつくことまちがいない。ところで、中国人の発音と四声は、地方によってずいぶんちがう。東北は捲舌音がまるで無い。山東半島はJがGに変わる(〈餃子 jiǎozi〉をギョーザと発音してくれるから、うれしくなる)。河南へ行くと二声と四声が逆になり、武漢の人の発音は日本の栃木に似て重い。北京っ子が何にでも〈儿〉をつけるのは、江戸っ子のペランメエと一脈通じる。

だからいいかげんで良い、というのではない。聞きわけの力が必要だということだ。そして基礎をキチンと固めておけば、応用動作は意外に楽だというのが、私の実感だ。

まぶたに浮かぶ——暗誦の効用

日中友好協会主催の中国語弁論大会で審査員をおおせつかり、出場者の真剣な話しぶりを目にして、自分が中国語を勉強してきた過程を思い出した。

私は一時期、暗誦に凝ったことがある。気にいった内容で、ことばの使い方や文法上の構成もすぐれている名文を、そんなにたくさんではなく、だがとにかくくりかえしそらんじた。ピ

ッチャーなら「投げこむ」、マラソン選手なら「走りこむ」といわれるが、私は文字どおり「覚えこんだ」。

これをやっている内に、面白い現象がおきた。ラジオで中国人アナウンサーの声を聞くと、マブタに活字が次々浮かんでくるようになったのだ。歌謡曲だと、マブタに浮かぶのは「母の顔」か「愛しい人の面影」と相場がきまっているが、その頃の私は、耳にする中国語が全部、字になってマブタに焼きついた。

今にして思えば、これが中国語らしい文法構成と単語の使いわけを身につけるのに、ずいぶん役に立った。前に述べた基本動作、定石とかセオリーとかいったものの一端をつかんだ、という実感があつたし、相性の良い名詞と動詞、動詞と目的語の組み合わせも、おのずと覚えていったように思う。それから、新語を見つけたらすぐ使ってみることも、暗誦にこつてからは、オックウにならなくなった。筑紫哲也氏が、英語を勉強する上で「基礎的な構文の暗誦の効用」を説いておられるが、全く同感である。

実は今にして思えば、暗誦の目に見えない、だがもっと重要な効用が、もうひとつあった。「マブタに字が焼きついた」おかげで、中国語で物事を考えることができるようになったことだ。いちいち頭の中で翻訳せず、中国語で眼や耳から入ってきたものは中国語で受けとめ、日本語で読んだり聞いたりしたものには日本語で反応する、ということが、自然にできるようになった。

上には上があるもの。中国国際旅行社の陳蕙娟さんは東京育

ちだから、日本語で話していると今でも女学生ことばが出る。建国初期に帰国後、ロシア語もマスターした。だから、夢も中国語、日本語、ロシア語で「見分ける」のだそうだから恐れ入る。もうここまでくると神業で、凡人の私などには及びもつかない。

電話のすすめ——上達のメヤス

外国語がどのくらい身についたかのメヤスは、私の経験では三つある。

① こども相手に話を通じるか。こどもは大人とちがって、カンや推測を働かせてくれないから、鏡のように正直に「通じぐあい」がわかる。

② 電話で話がつうじるか。電話は面談とちがって、表情もジェスチャーも見えないから、耳と口だけにたよらざるを得ず、実力がモロに試される。

③ ケンカ(といっても手を出すのではない)のとき、つまり理性を失ったときでも意思表示ができるか。

ケンカはおすすめるわけにはいかないが、要はどんな場合にも意思表示ができ、且つ他人の意思の伝達もできるという資質と技能を身につけることだと思う。

そういったら、西園寺一晃氏に「もうひとつありますヨ、中国語で恋を語れるか、というのが」といわれた。残念ながらこ

れは体験がないからピンとこないが、ポーッとなってもキチンと意思表示ができるかどうか、という意味らしい。

こういったメヤスの中で、手っとりばやいのは電話だろう。中国へ行って仕事をするとき、まず泣かされ、苦勞するのも電話だ。

受話機をとり、ダイヤルをまわす。話し中！ 朝の8時すぎには、番号をまわし終わらない内に、話し中の信号になることもよくある。電話の回線が少なく、皆いっせいにかけるから、イライラがつづく。やっとかかったと思ったら、いきなり〈誰呀!? shéi ya〉といわれて度肝をぬかれる。受けたほうが自分から名乗ろうとは決してしてくれない。おまけにつっけんどんなことおびたしい。面談のときのあのにこやかな顔とは別人のようだ。そしてあのナマリ。

こういった難所を、一山、二山、三山越えの思いで、ようやく用件を伝えおいた時には冷汗三斗——という体験をビジネスマンはたいていおもちだ。

でも半年もこれをやっていると、たしかに実力が蓄えられる。やはり上達のメヤスは電話、である。

2

中国語のいいまわし

売買か買売か——名詞

読売新聞の田川五郎氏が、「国際貿易」紙で、日本語と中国語の名詞がサカサマになる例を紹介しておられた。

平和↔〈和平 héping〉

売買、輸出入↔〈买卖、进出口 mǎimài, jìnchūkǒu〉——売ってカネを得てから買うのか、モノを仕入れてから売なのか？

これには、「中国は社会主義、日本は会社主義」というオチまでついていた。

同じ漢字を使うところから、つい日本語にひきずられて“直訳”してしまいがちだ。特に名詞がそうだが、そのままでは通じなかったり、ちがう意味になったりすることが少なくない。

通じない例

原子力——中国語では〈原子能 yuánzínéng〉

機関車——「〈火车头 huǒchētóu〉または〈机车 jīchē〉

定期便、特別機——〈班机、专机 bānjī, zhuānjī〉

従業員——〈职工 zhígōng〉

ちがう意味にとられる例として、「手紙」が中国語ではチリ